

右/70年代のモスリン着物。左/通崎さんが子供の頃着ていたウール着物。帯は、メテユンデ(川島織物)の半幅帯「ハレリーナ」

撮影/福森クニヒロ
AD/谷本天志
着つけ/山崎真紀
ヘア・メイク/緑 素子
モデル/西村愛華 藤川 清



写真右 ●古美術高瀬 ☎075-222-0793
写真右下/麩嘉「手鞠麩」¥840(5個)「梅麩」¥315 ●麩嘉 ☎075-231-1584
林孝太郎造酢に伝わる雛人形/林孝太郎造酢「すし酢」「京あまみ米酢」共に360ml ¥556 ●林孝太郎造酢 ☎075-451-2071



通崎睦美の KYOTO アート散歩

お雛祭り・ちらし寿司 ②
Ohina-matsuri Chirashizushi



多くの人形を保有し、人形の寺ともよばれる京都の宝鏡寺では、毎年雛祭りの頃人形展が開かれ、寺に収蔵されている様々な人形を見る事が出来る。ここは、尼門跡寺院ゆえ、代々内親王が入寺され、父君である天皇から季節やことあるごとに人形が贈られてきた。その中にはいくつかの立派な雛人形も含まれる。いつの時代もどんな階級の人であっても、親が子を思う気持ちは変わらないものだな、と思う。

三月三日の桃の節句。お人形を飾ってお祝いする雛祭りは、平安時代、紙で作った「人形(ひとかた)」で身体をなでて身の汚れを移し、水に流して厄払いをしていたこと。それと、「ひいな(ちいさくてかわいらしい意)」という人形遊び、また幼い子供の身辺に置いて災いを移し負わせるために作られた「天児(あまがこ)」「遣子(ほうこ)」などが結びついてきたものといわれる。

雛人形も、当初は草や紙製で川に流してしまっていたが、室町時代には作りが精巧となり紙雛、立ち雛の形で室内に飾られるようになった。やがて江戸時代になると、安定のいい座り雛が生まれ江戸中期には華やかな段飾りが庶民の間にも広がっていった。

なにげなく繰り返す行事も、そのいわれを聞くと、改めて納得することがある。そして、それらを知ると、少し豊かな気持ちになるから不思議だ。

雛祭りにつきものの、菱餅。もともと餅は古代から災厄を払うとされ、お供え物にされるが、菱餅にも意味があり、その3色は、寒い冬(白)を過ぎ、緑もえだす初春(草色)から花の咲く春(紅色)を喜ぶ気持ちを表しているといわれる。また、雛祭りにいたたく蛤のお吸い物。この蛤は、左右合致して他の蛤とは決して合わないことから、女性の貞操の象徴とされる。

この季節、町の骨董屋さんを覗けば、お雛様に出会えることがある。骨董屋さんのうれいところは、それらをなんとも間近に見られることだ。中でも寺町にある「古美術高瀬」では雛人形に詳しい店主が集めた江戸後期から昭和初期の出来のいい京雛と、二年を通して対面することができる。

他にもうれしい場所がある。前述、宝鏡寺からほど近いお酢屋さん「林孝太郎造酢」。ここには孝明天皇ゆかりの雛人形があり、買い物ついでに気軽に見せていただける。お雛さんを鑑賞して、京都の名水を使ったおいしいお酢を買う。さらに同じ上京区の「麩嘉」で手鞠麩を手に入れお寿司に散らせれば、とても贅沢なちらし寿司の完成。

子供の健やかな成長を願う、桃の節句。殺伐とした出来事が多い昨今だが、楽しいお寿司を前にしたうれしそうなお子供達の顔がある限り、日本も捨てたもんじゃない。そんな気持ちにはほしくないだろうか。